

百戦百勝

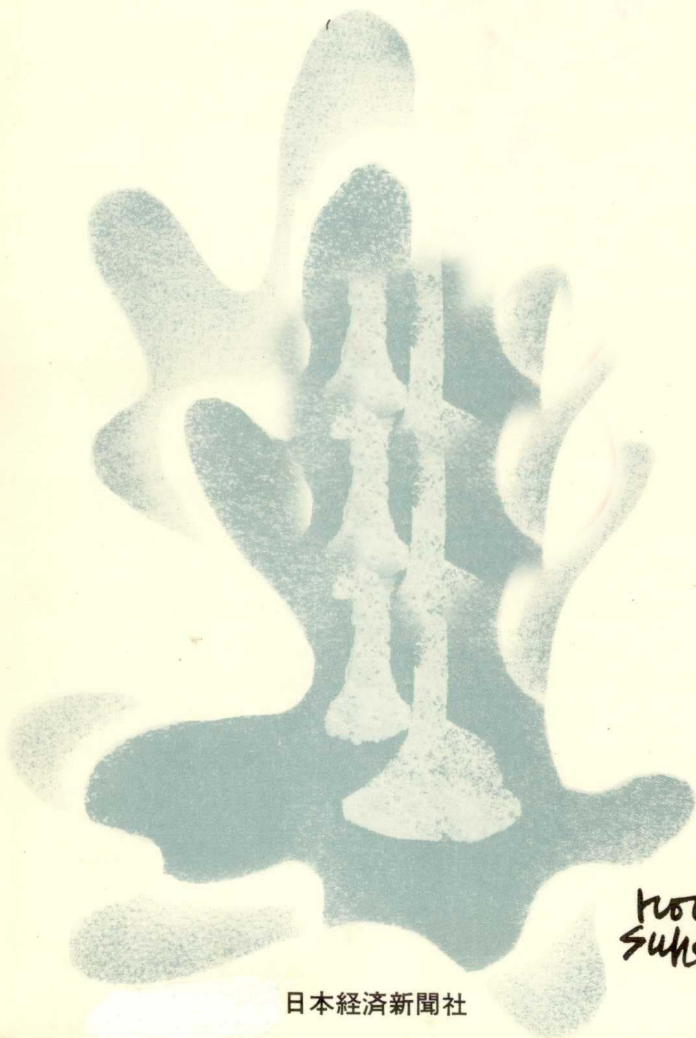
働き一両 考え五両

城山 三郎



券

城山三郎



100
5412

日本経済新聞社

百戰百勝

昭和四十九年九月十日 一刷
昭和五十八年九月十日 二十刷

著者 城山三郎

© Saburo Shiryama 1974

發行者 前田哲司

發行所 日本經濟新聞社

東京都千代田区大手町一—九—五
電話〇〇五〇—〇三三 振替東京三三三

印刷・奥村印刷／製本・大口製本

ISBN 4-532-09701-0

目

次

	序章	都心の妖怪	
一	青い風の中で		7
二	ネズミがだめなら		38
三	浮き沈み		53
四	寝耳に水		72
五	妻をめとらば		85
六	暴力買い		105
七	金庫とヤカン		120
八	ある情報		150
			168

	九	本物とニセモノ
	一〇	うわさの男
	一一	黒頭巾出現
	一二	事件前後
	一三	不自由知らず
	一四	食わんがため
	一五	宝の山
終章		花開く

百戰百勝

装丁 上西康介

序章 都心の妖怪

七階建のビルの中は、がらんとしていた。

正月元日のことでもあり、日本橋のオフィス街に在るそのビルに、人気がないのは当然であった。一階の商店街はじめ、各階のどの会社も、二、三日前から休業。壁も床も冷えこんだ中に、わずかに保安灯だけがついて、幽霊の出る古城にでも迷いこんだ感じである。靴音だけが、高く壁にこだまを返した。

歩いているのは、角力取りのような大男であった。名は、春山豆二。下り目と下り眉、大きな福耳。頭は、八分通りはげている。

豆二は、勝手知った非常口から、そのビルの中へ入ってきた。豆二が訪ねようとするのは、ビルの所有主兼管理人兼掃除婦であるお安ばあさん。一階の歩道に面した花屋も経営している老女である。

もちろん、この日、花屋は閉店。非常口脇の小さな管理人室をのぞいたが、そこにもお安の姿はなかった。ただ、新聞や、わずかの年賀状、それに、ひとり占いのトランプなどが散らばったままで、遠出した様子ではない。

「お安のやつ、どこへ行ったんだ」

つぶやきながら、豆二は一階の廊下を歩いた。そして、エレベーター・ホールまできて、ぎくりとした。

二基のエレベーターの中、一基が動いていた。階数を示す数字に、6 5 4と、サインの灯が入って行く。

「来ている人間があるんだな」

すると、その声がかきこえてもしたように、灯は、4 5 6 7 Rと上って行って止まった。

Rとは、屋上である。正月の寒空の下、屋上へ出るとは、よほど酔興か、気のおかしいやつと思っただが、そのとたん、Rの灯は、ウインクするように点滅したかと思うと、また下へ動きはじめた。

7 6 5 4 3

そこで止まると、くるりと尾をひるがえし、

3 4 5 6 7

無人同然のビル内のことである。各階の人々が上下しているわけではない。だれかが、エレベーターをいじっている。

7 6 5 4 3 2

エレベーターは、また下りてきて、そこで再びはね上って行った。

2 3 4 5 6 7

「ドレミファソ、ソファミレド」などと、ピアノのキイをいたずらしているような動きである。

豆二は、下っている眉をつり上げた。これが自分の会社なら、雷を落とすところである。

「だれだ、エレベーターであそんでいるのは」

吐き出すようにいったあと、豆二は、ぞっとした。

正月でビルは無人。オフィス街のことであり、外から子供などがしのびこむということもない。とすると、まるでエレベーターが、生命を持って、自由に遊び出したかのようなのである。

豆二は、呼びボタンを強く押した。

5 4 3 2 1

エレベーターは静止し、えんじ色のドアが開いた。

瞬間、その中から、髪をふりみだした妖怪のようなものが、おどりに出てきた。

「あっ！」豆二は思わず声を上げた。ついで、その妖怪の正体を見て、にが笑いとともに、

「なんじゃ、お安か」

「なんじゃとは、なんや」

お安は、欠けた乱杭歯を見せて、突っかかってきた。

「あんた、いい歳して、いったい何をやってるんだ」

「見たとおりや。エレベーターであそんでたんや」

灰色に汚れた髪をふるわせて、答える。いつものくたびれたヨウカン色の着物。すり減った下駄。

この老婆が、齒の欠けた口で笑いながら、だれも居ない近代的なビルの中で、たったひとり、エレベーターにのってあそんでいる――。

豆二は、声が出なかった。こっけいというより、鬼気迫る感じがした。

「……正月なのに、どこへも行かんのかい」

「行きや、金がかかるやないか。それに、テレビの公開番組見に行くんが、わてのただひとつのしみやが、どこも正月番組をみんな暮の中に録画してしまったさかい、どこへ行っても、正月中はひとつも公開番組見られへん。出かける先がないわ」

「……」

「それに、あんたかて、わてがここらどこへも出かけんの知って、訪ねてきたんやろ」

「そりやそうだが、しかし、まさか、エレベーターで……」

「指先ひとつで、こんな大きな鉄の箱がおとなしゅう動くんや。運転いうんは、たのしいもんや」

ボタンを押すだけのことで、運転というほど大げさなものではない。

だが、お安は、齒の欠けた口をあけ、いかにもたのしそうにいった。

「ふだん、わてがのると、汚ないばあ、どこから来よったと、サラリーマンたちににらまれるよってな。わてがこのビルの持主いうことも知らんで。けど、ビルの評判落とすと、わての損になるさかい、辛抱しとったんや」

お安は、そういつてから、豆二に向かい、

「どや、いっしょにのらへんか。わてとアベックも、わるうないで」

かすれた声で笑った。

豆二は、気が進まなかった。たとえ用があるといえ、正月早々、こんな妖怪のような老婆と、密室にとじこめられたくはない。

だが、大男のくせに、まるで目に見えぬクモの糸にからめとられるように、豆二はエレベーターの中へつれこまれた。

「さあ、わてらアベックだけや」

お安は、幾重もの皺の中の目を細め、筋ばった指で、ぽんと「7」を押した。

エレベーターは、軽快に上昇しはじめた。お安は、豆二の腹あたりに、そのみだれた髪を寄せてきた。

「久しぶりに二人だけや。何とのおう、変な気になるやないの」

変な気どころか、豆二としては、身ぶるいしたいほどである。

それに、お安ひとり長時間こもっていたせい、エレベーターの中には、すえた体臭のようなものがこもっていた。

「何か、におうな」

「それは、金のおいや」

「……」

「わてら、金持二人がのってる。金のおいが溢れ返つとるんや」

流し目で見上げながら、お安は、また顔を近づけてきた。

豆二は払いのけるように、

「それにしたって、エレベーターを動かしゃ、電気代がかかるじゃないか。わしの会社で計算させたところでは、たしかエレベーターが一回止まるたびに、十六円とか、かかるはずだった」

お安は、低い鼻の先で笑った。

「心配要らへん。エレベーターの電気代は、このビルに入つとる会社へ割りふるだけや。わては一文も払わんでええ。乗り放題や」

エレベーターは七階に止まり、ドアが開きかかった。とたんに、お安は指をはずませ、「2」

を突いた。

ドアは閉まり、エレベーターは地底へ吸いこまれるように下りはじめる。指示盤の灯が、654と走って行く。ただそれだけのことである。景色が見えるわけでも、スピードが変わるわけでもなく、少しもおもしろくない。これをひとりでくり返してたのしんで居るといのは、やはり、精神異常か、一種の妖怪である。

灰色のさんばら髪、こけた頬、齒の欠けた口、ヨウカン色の着物、ちびた下駄——見れば見るほど、妖怪に近い。女ながらに、東京という大都会の血を吸って生きている妖怪。

エレベーターが二階で止まると、その妖怪の骨と皮ばかりの指が、すかさず、今度は、「R」を押した。エレベーターは、屋上に向かって上昇に転じた。

豆二は、落ちつかなくなった。こんなことをしている中、もし、停電なり故障でもしたら。

正月のビルのエレベーターの中で、老人の男女二人があそんでいようとは、だれも考えまい。気づかれぬまま、仕事はじめの五日か六日まで閉じこめられ、そのあげく、化物でも発見したような大さわぎになる——。

豆二は、早く下りたくなった。

ただ、お安の上きげんの中に、わざわざやってきた用件を切り出しておく必要がある。

「今度、うちの会社でも投資信託をはじめめる。ハルマメ・オープンという名でな。そこで、あんなに一千万でも二千万でも、応援してもらおうと思って」

お安は、急に、しゃんとした声になった。

「一千万、オープン投資信託を買えというんか」

「あんたの財産のパーセントにもならんだろう」

「何いうてんや。あんたの財産こそ何百億。一桁ちがい。ほんま、桁ちがいや」

「それにしても、お互い、一代でようもうけたものだ」

大男の豆二と、小女のお安が、エレベーターの中で顔を見合わせた。しげしげと、相手を見つめる。

米問屋の倉庫に寝起きしていた小僧と、安食堂で働いていたまだ初々しいお下げ髪の少女の五十年後の姿――。少しばかり劇的で、胸がつまりそうになるところだが、お安は、すぐまた皺だらけの顔をしかめた。

「わてはエレベーターであそんどる。それなのに、正月早々、大社長のあんたは、商売にくる。桁ちがいにいるはずや」

エレベーターは、七階に着いた。

「けど、投資信託の設定なんて、大仕事やな。四大証券の後追ってやるんや。よほど、新聞やテレビで大宣伝せんと、客は集まらへんで」

ドアが開き切る前に、お安の指は、「3」を突いた。一階へ下りるつもりはないらしい。

「おい、たのむ、もう下してくれ。目が回る」

豆二は悲鳴を上げた。

「乗物好きやいうに、あかん」

「……茶でも出してくれ」

「よしや」

だが、エレベーターを下り、管理入室へ行って出されたのは、コップに汲んだ水であった。馴れているので、豆二はおどろきはしない。

「正月早々、ひとの寿命や災難を占うのも、ええもんや」

お安は、散らばっていたトランプをかたづけはじめた。エレベーターあそびの前は、ひとり占いをたのしんでいたらしい。

かたづけたトランプを、お安は小さな神棚に上げ、手をたたいた。灯明が、消えかかっている。

四畳半ほどのせまい部屋、くたびれた着物。それだけ見ていると、お安の生活は、もう何十年もの間、少しも変わっていないかのようである。

「冬子さん、元気かい」

お安は、豆二の妻の名を気軽に呼んだ。豆二がうなずくと、

「当分、死にそうにないな」

「……うん」

「インテリのくせして、ええ奥さんや」

ほめたあと、すぐ続けて心外そうに、

「ええひとほど、早う死ぬというのになあ」

湯のみについた水を一口のみ、

「あかんなあ。占いによると、あと十年は生きそうや」

ちよつと声を落としたと思うと、すぐまた元気よく、

「けど、わては、もっと長生きするで。ひよつとすると、百五十まで生きるわ」

お安は、思い出したように、また腰を上げ、神棚からトランプを下した。カードの四隅は、すりきれて、まるみを帯びている。